

## ネヘミヤ記10-13章「主に属する者たち」

### 1A 堅い盟約 10

1B 署名 1-27

2B 誓いへの参加 28-39

1C すべての人々 28-29

2C 神の民としての分離 30-31

3C 神の宮への捧げ物 32-39

### 2A エルサレムへの居住 11

1B 十一の義務と志願者 1-2

2B 祝福されるべき人々 3-36

1C ユダとベニヤミン人 3-9

2C 祭司とレビ人 10-24

3C 自分の村々に住む人々 25-36

### 3A 城壁の奉獻 12

1B ダビデの賛美の奉仕者 1-26

2B 聖歌隊の行進 27-47

1C 準備 27-30

2C 城壁の上の二隊 31-43

3C 大きな喜びの貢献 44-47

### 4A 不断の霊的戦い 13

1B 混血の者 1-3

2B 神の宮への侵入 4-9

3B レビ人の欠乏 10-14

4B 安息日の商売 15-22

5B 異邦人との婚姻 23-27

6B 宮の汚れ 28-31

## 本文

ネヘミヤ記 10 章です。私たちは前回、イスラエルの民はエルサレムに集まり、エズラによって神の律法を聞き、そこに悲しみと共に大きな喜びが与えられました。そして彼らは、神によって示された通りに、自分たちの罪の告白をしました。

### 1A 堅い盟約 10

そして、その告白が終わった後に、堅い盟約をしたと 9 章の最後にあります。「これらすべてのことのゆえに、私たちは堅い盟約を結び、それを書きしるした。そして、私たちのつかさたち、レビ人

たち、祭司たちはそれに印を押した。(38 節)」初めに、署名をして印を押した者たちの名が記されています。

### 1B 署名 1-27

10:1 印を押した者は次のとおりである。ハカルヤの子の総督ネヘミヤ、およびゼデキヤ、

ネヘミヤが率先して先に印を押しています。彼は真実な指導者です。盟約を破った時にまず自分がその呪いを受ける、その責任を負っているからです。

そしてゼデキヤから 8 節のシマヤまでが祭司たちの名です。9 節からレビ人であり、それから 14 節以降に民のかしらたちの名があります。順番が大事ですね、神の民として生きる時にもっとも責任のある者たちは、初めに祭司、それからレビ人、そして民のかしらです。それぞれの人々が神の支配を受けるためには、主に仕える祭司とレビ人が彼らを導かなければいけません。

### 2B 誓いへの参加 28-39

#### 1C すべての人々 28-29

10:28 このほかの民、祭司、レビ人、門衛、歌うたい、宮に仕えるしもべたち、また、国々の民と縁を絶って神の律法についた者全員、その妻、息子、娘たち、すべて理解できるまでになった者は、  
10:29 彼らの親類のすぐれた人々にたより、神のしもべモーセを通して与えられた神の律法に従って歩み、私たちの主、主のすべての命令、その定めとおきてを守り行なうための、のろいと誓いとに加わった。

27 節までに書き記された者たちは、あくまでも盟約の用紙に署名をした者たちであり、実は、ここに書いてあるように、ユダヤ人たちの多くの者たちがこの誓いに加わりました。律法を読んだ時にも、それを理解する国語能力を持っている子であれば、その中に加わっています。では、同意書の中身を見ていきましょう。

#### 2C 神の民としての分離 30-31

10:30 すなわち、私たちの娘をこの地の民たちにとつがせず、また、彼らの娘を私たちの息子にめとらない。

エズラ記、そしてネヘミヤ記に渡って、貫かれている神の掟であります。なぜ、ここまで彼らが外国人との婚姻をしてはいけないという戒めに拘ったかは、人との結びつき、あるいは交わりによって、全てのことが変わってしまうことを彼らはよく知っていたからでした。

これは午前中に学びましたが、神だけを愛する、そして神を愛する兄弟姉妹を愛するということが献身することによって初めて、そこに命があります。鍵となる言葉は「分離」です。私たちは、世

から分離して、神につく者となります。これはちょうど、結婚と似ています。私は、他のあらゆる女性との結びつきの可能性をすべて排除して、そして男性であってもその友情をもある程度犠牲にして、一人の女のひととの結びつきを選び取りました。同じように、この世との結びつきから分離しますが、分離することが目的なのではありません。分離だけなら、孤独になり孤立してしまうだけです。そうではなく、神とキリストに結びつくために分離するのです。そして同じように、神とキリストにつく者たちと交わるために、世との交わりから離れます。

このような献身的な愛の関係が土台にないと、信仰生活や教会生活が律法主義的なものとなります。聖書で語られていること、教会で語られていることを表面的に、かつ規則的にしか守ることができないからです。そしていつも、指導者や他の信者に頼りながら生きることとなります。

10:31 たとい、この地の民たちが安息日に、品物、すなわち、いろいろな穀物を売りに持って来ても、私たちは安息日や聖日には彼らから買わない。また、私たちは七年目には土地を休ませ、すべての負債を取り立てない。

二つ目の誓約は、安息日です。安息日を守ることも、神の民であるのか、そうでないかのはっきりとした区別を与えます。周りの人々がいつものように商売をしているのに、自分は買い物にいかないのです。

しかし安息日を聖なるものとするのは、言い換えれば、主を徹底的に礼拝することを表明しているに他なりません。つまり、どんなに仕事があっても、それをいったん止めることによって、神こそがすべての主であることを告白しているからです。自分の行ないで物事が進むのではなく、主がおられるから物事が運んでいきます。このことを知るには、自分が止まらなければいけないのです。これには再び「分離」が必要になります。神を認めない人々は、そのまま働きます。自分が人生の主導権を握っていると思っているから当然のことです。しかし主を自分の神としている人々は、この方こそが自分の人生の主導権を握っておられるのですから、礼拝するのです。

そして安息日には、もう一つの意味合いがあります。安息年、すなわち七年に一度、土地を休ませるのですが、そこには、労働している貧しい人々や家畜を休ませ、その収穫を食べさせるという目的があります(出エジプト 23:11)。ですからここにあるように、七年毎に負債の帳消しをします。同胞の民で貧しい人々に施しをする、あるいは弱い人々を助けるのです。

これは、私たちが教会の兄弟姉妹を顧みることに他なりません。自分たちのしていることを休む、そして他の兄弟姉妹を顧みることです。そして負債は、罪の赦しにも霊的には関わります。自分が何かをした、またはされたということから罪を赦せない、という思いがあるかもしれません。その罪を赦すためには、また赦してもらうためには、私たちは主の前に出て、静まっていなければいけません。

### 3C 神の宮への捧げ物 32-39

そして三つ目が 39 節までで長いですが、神の宮に捧げ物をするということです。

10:32 私たちは、私たちの神の宮の礼拝のために、毎年シェケルの三分の一をささげるとの命令を自分たちで定めた。10:33 これは、並べ供えるパンと、常供の穀物のささげ物、また常供の全焼のいけにえ、また、安息日、新月の祭り、例祭のいけにえ、聖なるささげ物、また、イスラエルの贖いをなす罪のためのいけにえ、さらに、私たちの神の宮のすべての用途のためであった。10:34 また私たち、祭司とレビ人と民とは、律法にしるされているとおり、私たちの神、主の、祭壇の上で燃やすたきぎのささげ物についてのくじを引き、毎年、定まった時に、私たちの父祖の家ごとに、それを私たちの神の宮に携えて来ることに決めた。

神の宮の礼拝のためのシェケルですが、これは律法においては二分の一が定められています。しかし、おそらく彼らは経済的に逼迫していたのででしょう、三分の一に減らしています。その用途は、主を礼拝するための穀物の捧げ物や動物のいけにえのためです。そして祭壇の薪については、毎日、いけにえを捧げるのですから必要なのですが、ユダの土地は日本のように木々が生い茂っているのではなく、希少な資源です。ですから、これも祭司やレビ人も含めて分担して誰かに負担が重くのしかからないようにしました。

主を礼拝するためには、信仰の共同体が自分のものを捧げるという献身が必要です。それは財産かもしれないし、または自分の時間や労力でもあります。主を心から賛美したい、そして御言葉を聞きたい、そして兄弟姉妹と交わりたいと願うのであれば、その霊的なことは、これらの物質的な事柄の支えがあって初めて成り立ちます。もし物質的な事柄が疎かにされているのであれば、それは霊的な事柄も疎かにされていることの表れでしかありません。(Campbell Morgan “Whereas the house of God today is no longer material but spiritual, the material is still a very real symbol of the spiritual. When the Church of God in any place in any locality is careless about the material place of assembly, the place of its worship and its work, it is a sign and evidence that its life is at a low ebb”<sup>1</sup>)

10:35 また、私たちの土地の初なりと、あらゆる木の初なりの果実とをみな、毎年、主の宮に携えて来ることに決めた。10:36 また、律法にしるされているとおり、私たちの子どもと家畜の初子、および、私たちの牛や羊の初子を、私たちの神の宮に、私たちの神の宮で仕えている祭司たちのところに携えて来ることに決めた。

これはどちらも、モーセの律法に書かれていることです。初穂の日が過越の祭りの三日目に定められており、それは大麦の初穂です。そして五旬節では小麦の初穂が捧げられます。また、初

---

<sup>1</sup> Wiersbe, W. W. (1996). *Be Determined*. “Be” Commentary Series (123). Wheaton, IL: Victor Books.

子も捧げられます。家畜であれば、神の宮でほふります。子供であれば、羊で贖いをしますので、羊を屠ります。自分の初物あるいは初子を捧げることによって、自分は主のものだということを告白しています。ですからイエスを主とすることは、自分の初穂、初子を捧げることに他なりません。自分中心の生活から神中心の生活へと悔い改めました。そして、その罪をイエスが血を流されることによって、取り除いてくださいました。そして自分自身の最も大切なもの、自分の中心となっているものをこの方に明け渡すのです。

これは、私たちが毎週捧げる献金においても同じであります。つまり、収入があればそれをすぐに主に捧げるものとして、分けるのです。もちろん主が与えられているものを喜び楽しむ、また自分の生活を支えるために主が賜ったものですから、全てを捧げるものではありませんが、しかし初めに入ってきたものを分けて捧げるということは、自分の残りの財産もすべて主が下さったものであることを意識することができます。

10:37 また、私たちの初物の麦粉と、私たちの奉納物、およびあらゆる木の果実、新しいぶどう酒と油を、祭司たちのところに、私たちの神の宮の部屋に携えて来ることにした。また、私たちの土地の十分の一はレビ人たちのものとした。レビ人が、彼ら自身で私たちの農耕するすべての町から、その十分の一を集めることにした。10:38 レビ人が十分の一を集めるとき、アロンの子孫である祭司が、そのレビ人とともにいなければならない。レビ人はその十分の一の十分の一を、私たちの神の宮へ携え上り、宝物倉の部屋に納めなければならない。10:39 この部屋に、イスラエル人とレビ人たちは、穀物や、新しいぶどう酒や油の奉納物を携えて来るようになっているからである。そこには聖所の器具があり、また、当番の祭司や門衛や歌うたいもいる。こうして私たちは、私たちの神の宮をなおざりにしないのである。

律法には、十分の一を主に捧げるという掟があります。それをまず、レビ人に渡して、レビ人は受け取ったもののさらに十分の一を祭司に渡します。ここから教会では、「什一献金」の制度ができました。イエス様も、マタイ 23 章 23 節において什一は疎かにしてはいけないということを仰っておられます。しかし、使徒たちの書簡には什一を捧げろという指導はありません。ですから確定した掟ではないのですが、しかし什一は前提であり、喜んで捧げること、惜しみなく捧げること、この恵みを知ることは強く教えています。

そして、それらの捧げ物が届けられるのは、ここにあるようにレビ人の生活のためであり、祭司たちの生活のためであります。祭司の生活を支えることと、レビ人の生活を支えることは、すなわち「神の宮をなおざりにしない」ことを教えているのです。これがネヘミヤの情熱でした。神の宮をなおざりにしない、礼拝を第一優先にすることが、最終的に神の民が敵から守られる最も強い要塞であることを知っていたからです。

主に仕える人々を支えることそのものが、自分自身が主を礼拝することにつながります。なぜな

ら、その人が主に仕えることによって自分が神を知ることができるようになり、自分の益になるからです。新約聖書には、この教えについてはしっかり、はっきり書かれています。「よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。聖書に「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけない。」また、「働き手が報酬を受けることは当然である。」と言われているからです。(1テモテ 5:17-18)」

しかしパウロは、コリント人への手紙第一において、自分は敢えて報酬を得ていない話を彼らにしています。それは、むしり取っている偽教師らがはびこっていたからです。受け取ることは当然の権利だったのですが、そのような人々がいるから自分の手で働いていると言いました。今の時代も、こうした問題があることを認めざるを得ません。ですから、私たちはこの権利が乱用されることにも注意を払わなければいけません。同時に、パウロと同じように、これは当然行われるべきこととして教えていかなければいけません。私個人は、この教会に当てはめるのであれば、「*主の働きに労している人々が、それに専念できるように支えるべきだ。*」という考えです。私自身もそれに当てはまるのですが、私だけでなく、奉仕の働きのために労し、けれどもそのために安定した仕事も犠牲にして働いている方々のためには、生活の一部を教会が支えるべきだと考えています。

ここで大事なものは、あくまでもネヘミヤの「*神の宮をないがしろにしない*」という情熱です。それは、不信者とのつり合わぬくびきを負わないことから始まり、主の礼拝を遵守し、そして教会において物質的な必要を支え、また献身的に奉仕している人々を支えることによって、ないがしろにしないということです。

## **2A エルサレムへの居住 11**

そして、その情熱はエルサレムに人々を住ませるところにも表れています。

### **1B 十一の義務と志願者 1-2**

11:1 民のつかさたちはエルサレムに住んでいたが、ほかの民は、くじを引いて、十人のうちからひとりずつ、聖なる都エルサレムに来て住むようにし、あとの九人をほかの町々に住ませた。  
11:2 すると民は、自分から進んでエルサレムに住もうとする人々をみな、祝福した。

城壁が完成された時に、7章4節によると、「この町は広々としていて大きかったが、そのうちの住民は少なく、家もまだ十分に建てられていなかった。」とあります。そこは敵からの攻撃によって、危険でありましたし、町として整えられていなかったこともあります。けれども、エルサレムに住むということそのものが、「*聖なる都*」とあるように主の礼拝の中に自分自身を入れることになります。具体的には、そこに住めば神の宮に関わる事柄に自分たちが関わらなければいけません。毎日の生活はあるのですが、その生活と礼拝生活の境目がなくなります。そしてエルサレムの外に住んでいる人々が祭りやその他の神殿礼拝のために参上に来る時に、その人たちの世話をしたり、仕えていかなければいけません。けれども、このような人々が必要なのです、自分の生活が主の

生活になるようなことに自分自身を捧げる人々が必要になります。

実はこれは、終わりの日において完成します。ゼカリヤ書には、「エルサレムは、その中の多くの人と家畜のため、城壁のない町とされよう。(2:4)」との預言があります。そして、生活全体が聖なるものとなる、という預言もあります。「その日、馬の鈴の上には、「主への聖なるもの」と刻まれ、主の宮の中のなべは、祭壇の前の鉢のようになる。エルサレムとユダのすべてのなべは、万軍の主への聖なるものとなる。・・(14:20-21)」

ネヘミヤは、什一の原則を当てはめて、十人の一人、くじを引いて住まわせるようにしました。けれども、「自ら進んで」エルサレムに住もうとする人々がいました、そして彼らを祝福しました。自ら進んで、という言葉は、主に捧げ物をする時に、繰り返し、繰り返し出てきます。主の働きのために貢献したい、主のすばらしさに触れて、感動を受けた。だから捧げたいという人々の姿が数多く出てきます。

そしてエルサレムの中に住む人々がいればいるほど、神の礼拝が守られるように、地域教会でもいつも教会に関わる事柄に従事する人たちがいます。関われば関わるほど、ちょうどエルサレムでは敵のねたみや攻撃の的とされるように、自分を霊の戦いの中に入れることになります。ですから、6 節にエルサレムに住んでいたユダ族の人たちが「勇士」と出てくるように、霊的に武装していることが必要になるのです。

## 2B 祝福されるべき人々 3-36

### 1C ユダとベニヤミン人 3-9

3 節以降は、エルサレムに住んだ人々の名が列挙されています。4 節からユダ族の人々、その人数が6 節に書かれています。そして7 節からベニヤミン族でエルサレムに住んだ人々の名が書かれています。

### 2C 祭司とレビ人 10-24

10 節には祭司たちでエルサレムに住んだ人々です。祭司と言っても、二十四組に分かれて自分の時が来た時に神殿奉仕をするので、必ずしもエルサレムに住まなくても良かったのですが、この人たちは住みました。15 節以降にレビ人でエルサレム在住の人々、19 節には門衛たちがいます。ネヘミヤは、これらの人々の名に対して感謝の念が絶えなかったことでしょう。そして、20 節には、「その他のイスラエル人、祭司、レビ人たちは、ユダのすべての町々で、それぞれ自分のゆずりの地にいた。」とあります。

そしてエルサレムに常住している人々で、21 節に、「宮に仕えるしもべたちはオフェルに住み、ツィハとギシュパは宮に仕えるしもべたちを監督していた。」とあります。オフェルは、ダビデの町と神殿の丘にある部分です。そして22-24 節を読みます。

11:22 エルサレムにいるレビ人の監督者はバニの子ウジであった。バニはハシャブヤの子、ハシャブヤはマタヌヤの子、マタヌヤはミカの子である。ウジはアサフの子孫の歌うたいのひとりで、神の宮の礼拝を指導していた。11:23 彼らについては王の命令があり、歌うたいたちには日課が定められていた。11:24 またユダの子ゼラフの子孫のひとりで、メシェザブエルの子ペタヘヤは、王に代わって民に関するすべての事がらを取り扱った。

エルサレムにいるレビ人たちの名であります、その中に王の命令があつて歌をうたっている人々がいました。覚えていますか、ペルシヤ王は国庫からユダヤ人の神殿についてその資金を出しているということがありました。そして、そのお金を受け取っている歌うたいです。王はおそらく、彼らに自分のために、国のために祈れという命令も出しているのでしょう。政教分離の国に住んでいる私たちにはあり得ないことですが、しかし指導者のために祈り、執り成し、感謝して、平和で静かな生活を送ることは神の御心であります。そして、王の事柄について民に代わって事務をしているペタヘヤという人がいました。

### 3C 自分の村々に住む人々 25-36

そして 25 節以降は、ユダとベニヤミンの割り当て地の町々に、すなわち自分の先祖がいた町々に住んでいる人々の名が記されています。

### 3A 城壁の奉献 12

#### 1B ダビデの賛美の奉仕者 1-26

そして 12 章ですが、祭司とレビ人たちの奉仕者の名が再び列挙されています。26 節まであります。しかしここでは、ダビデが礼拝とその賛美のために組織を作ったことを思い出してください。歴代誌第一に詳細に書かれていましたね。それは、大きなイスラエル王国の中で行われたものですが、異邦人に取り囲まれた小さな共同体の中でもネヘミヤは、これをしっかり組織立てるために、再び系図を書いています。

ですので、祭司たちの奉仕とダビデの賛美を受け持つ者たちが強調されています。1-7 節には、祭司が二十四組に組分けされて奉仕 8 節には、「感謝の歌を受け持っていた。」とあります。12 節には、バビロン捕囚以前のエホヤキムの時代の祭司から、26 節にあるようにネヘミヤとエズラの時代の祭司までの登録された者たちの名があります。その中に 24 節ですが、「神の人ダビデの命令に従い、賛美をし、感謝をささげた。」とあります。

#### 2B 聖歌隊の行進 27-47

ここまでネヘミヤが書いてきた理由は、次の城壁の奉献式に携わる聖歌隊たちを紹介したいからです。

### 1C 準備 27-30

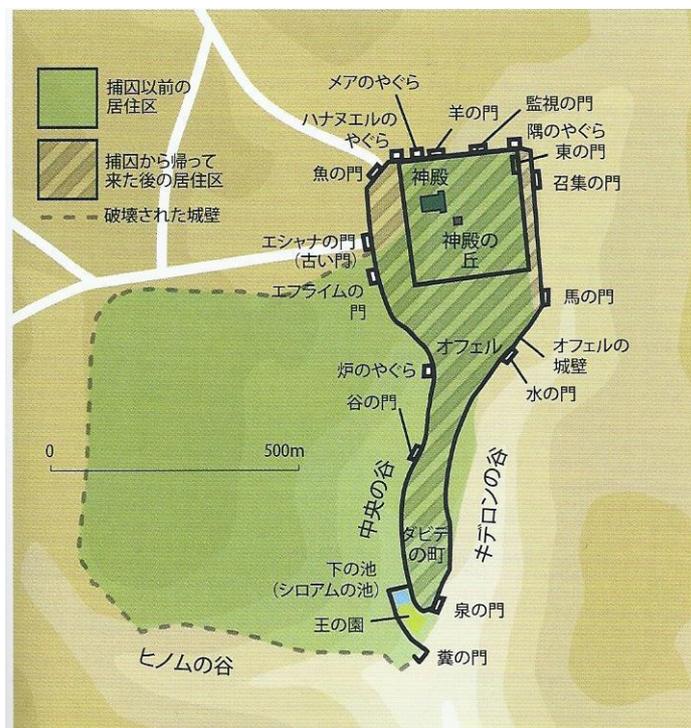
12:27 彼らはエルサレムの城壁の奉献式のときに、レビ人を、彼らのいるすべての所から捜し出してエルサレムに来させ、シンバルと十弦の琴と立琴に合わせて、感謝の歌を歌いながら喜んで、奉献式を行なおうとした。12:28 そこで、歌うたいたちは、エルサレムの周辺の地方や、ネトファ人の村々から集まって来た。12:29 また、ベテ・ギルガルや、ゲバとアズマベテの農地からも集まって来た。この歌うたいたちは、エルサレムの周辺に自分たちの村々を建てていたからである。12:30 祭司とレビ人は、自分たちの身をきよめ、また民と門と城壁をきよめた。

ゼルバベルとヨシュアが、神殿の定礎式の時にダビデの規定によって、主を賛美させました(3:10)。その時も彼らは主を賛美して、大声で主を喜びました。喜びがあふれて、老人たちの悲しむ声もあったのですが、それらが入り混じって、遠いところまで響き渡りました。そして今、城壁の奉献式においても、ダビデの賛美の規定による聖歌隊が生まれます。エルサレムの周囲に住んでいるレビ人たちを、祭司たちが集めてきて、そして歌をうたわせる準備をさせました。さらに、民、門、城壁をきよめた、と30節にあります。いけにえを捧げたので、主に対して聖なるものとなるべく、きよめの儀式も行ないました。

### 2C 城壁の上の二隊 31-43

そして、これまでの奉献式では見ることのない、ネヘミヤだけが考えた主への賛美の姿を見ることができます。

12:31 そこで私は、ユダのつかさたちを城壁の上に上らせ、二つの大きな聖歌隊を編成した。一組は城壁の上を右のほうに糞の門に向かって進んだ。12:32 彼らのうしろに続いて進んだ者は、ホシャヤと、ユダのつかさたちの半分、12:33 アザルヤ、エズラ、メシュラム、12:34 および、ユダ、ベニヤミン、シェマヤとエレミヤであった。12:35 祭司のうちのある者もラツパを持って進んだ。すなわち、ヨナタンの子ゼカリヤであった。このヨナタンはシェマヤの子、順次さ



帰還後のエルサレムの拡大

門の名称は、ネヘミヤ3章によるが、推測によるものが多い。

「バイブルワールド」 ニック・ページ いのちのことば社

かのぼって、マタヌヤの子、ミカヤの子、ザクルの子、アサフの子である。12:36 また、ゼカリヤの兄弟たちシェマヤ、アザルエル、ミラライ、ギラライ、マイイ、ネタヌエル、ユダ、ハナニであって、神の人ダビデの楽器を持って続いて行った。学者エズラが彼らの先頭に立った。12:37 彼らは泉の門のところで、城壁の上り口にあるダビデの町の階段をまっすぐに上って行き、ダビデの家の上を通過して、東のほうの水の門に来た。

聖歌隊を作ったのですが、それを二組に分けて、それぞれが反対の方向で回って、そして神殿のところで合流するというものです！おそらく、谷の門から彼らは城壁に上がったのでしょう。ネヘミヤがかつて、そこからたった一人で瓦礫になっていた城壁を巡回しました。今は、時計と反対回りの聖歌隊を読みました。糞の門まで行き、それからダビデの町のところは急斜面になっているので階段上になっていましたが、そこを上がっていき、水の門に来ています。この間、ラッパをもって祭司たちはそれを吹き、楽器ももってそれを奏でて、エズラが彼らの先頭に立っています。そして、東のほうの水の門まで来ました。

12:38 もう一組の聖歌隊は左のほうに進んだ。私は民の半分といっしょに、そのうしろに従った。そして城壁の上を進んで、炉のやぐらの上を通り、広い城壁のところに行き、12:39 エフライムの門の上を過ぎ、エシャナの門を過ぎ、魚の門と、ハナヌエルのやぐらと、メアのやぐらを過ぎて、羊の門に行った。そして彼らは監視の門で立ち止まった。

こちらは、時計回りの聖歌隊です。ネヘミヤはその最後についていましたが、谷の門から北にあがって、北壁で東に行きました。そして合流します。

12:40 こうして、二つの聖歌隊は神の宮でその位置に着いた。私も、私とともにいた代表者たちの半分も位置に着いた。12:41 また祭司たち、エルヤキム、マアセヤ、ミヌヤミン、ミカヤ、エルヨエナイ、ゼカリヤ、ハナヌヤも、ラッパを持って位置に着いた。12:42 また、マアセヤ、シェマヤ、エルアザル、ウジ、ヨハナン、マルキヤ、エラム、エゼルも位置に着いた。それから、歌うたいたちは、監督者イゼラフヤの指揮で歌った。12:43 こうして、彼らはその日、数多くのいけにえをささげて喜び歌った。神が彼らを大いに喜ばせてくださったからである。女も子どもも喜び歌ったので、エルサレムの喜びの声ははるか遠くまで聞こえた。

すばらしいです、ゼルバベルの時代と同じように、その喜びの大声ははるか遠くまで聞こえてきます。神の宮のところでラッパを吹き、そして歌うたいが歌い、そして数多くのいけにえを捧げました。彼らだけでなく、今ここには、女も子供も喜び歌ったとあります。全ての人が関わって、喜びにいっぱいにあふれて主を賛美しているのです！

なぜこんなにも喜び踊ったのでしょうか？主がこの城壁を建て直してくださったのだということを確認することができたからです。もちろん彼らはこの工事をする時に自分の手をたくさん動かしまし

た。しかし、すべてのことが初めから終わりまで主が成し遂げてくださったのだということを認めることができました。これはとても大事ですね、主がなされたことを、誰の所有にすることはできないのです。私たちの教会の働きも、主が行ってくださっているものです！誰も、自分のものだと主張してはいけなし、主張することはできません。

そして、ネヘミヤのみが行った、二組の聖歌隊による行進の賛美は、この城壁そのものの上を歩くことによって確かに主が自分たちを守ってくださることを、外にいる者たちにも、異邦人や敵どもにも示すことができました。ここに大きな喜びがあったことでしょう。なにしろ、敵トビヤは、「一匹の狐が上っても、その石垣をくずしてしまうだろう。(4:3)」と言ったのです！敵に対して、圧倒的な勝利を誇示することができました。

私がイスラエル旅行に行った時に、エルサレムにあるヤド・バシェムというホロコースト記念館で今でも強く印象に残っているガイドさんの言葉があります。子供記念館というものがあまして、その中を通ると一人一人の名前が朗読されています。真っ暗なところに、ろうソクの火が灯されています。そして、そこから出ていくと、エルサレムの住宅地が丘に建てられている様子が見られます。そしてユダヤ人のガイドはこう言いました。「これが、私たちの復讐です。」分かりますか、ドイツのナチスに対する復讐は、自分たちがこの土地でしっかりと生活することによって、「お前たちには私たちが滅ぼすことができない。」という顔を向けるのだ、ということです。

霊的にも同じです。私たちキリスト者は、心一つにして、声を合わせて主への賛美をしている姿に、悪魔、悪霊どもに対する圧倒的な勝利を誇らしげに示すことができます。私たちが互いに争い、ねたみ、分裂しているならば、悪魔は喜びます。しかし、主の働きが進み、心一つにして主をほめたたえているところに、あらゆる敵は全く面子を失わせるのです。

### 3C 大きな喜びの貢献 44-47

12:44 その日、備品や、奉納物、初物や十分の一を納める部屋を管理する人々が任命され、彼らは祭司とレビ人のために、律法で定められた分を、町々の農地からそこに集めた。これは、職務についている祭司とレビ人をユダ人が見て喜んだからである。12:45 彼らおよび歌うたいや門衛たちは、ダビデとその子ソロモンの命令のとおり、彼らの神への任務と、きよめの任務を果たした。12:46 昔から、ダビデとアサフの時代から、神に賛美と感謝をささげる歌うたいたちのかしらがあった。12:47 ゼルバベルの時代とネヘミヤの時代には、イスラエル人はみな、歌うたいと門衛のために定められた日当を支給していた。彼らはまた、レビ人には聖別したささげ物を与え、レビ人はその聖別したささげ物をアロンの子孫に渡していた。

先ほど誓約の中にあつた、神の宮への奉納物を管理する人々が具体的に任命されました。そして、すばらしいのは、今回の聖歌隊の働きで、祭司とレビ人がこのようなことをしているのだと感動して、ユダ人たちが喜んで捧げ物をしたということです。主に仕える者たちの働きによって、いかに

主がすばらしいことを行なったださっているのか、そのことを知ることができるのは幸いです。それまではただ漠然と、この人たちは動いているのだな、と思って眺めているかもしれませんが、いざその働きのダイナミズムというか、生き生きと御霊が働いておられることを知ると感動します。

そして歌うたいたちは、ダビデの時代から定められているものであり、ゼルバベルとネヘミヤの時代には彼らに日当が与えられていたことも記述しています。このようにして、絶えず賛美がエルサレムにおいて行われているように、注意深く行っていたのです。

#### **4A 不断の霊的戦い 13**

そしてネヘミヤ記の最後の章ですが、この章は私たちに生々しい現実を教えてください。それは、霊的な戦いは不断の戦いなのだ、ということです。ここまでユダ人たちが整えられ、主にお伝えすることが固められたと思いきや、わずかな間で道を踏み外している姿を見るからです。午前礼拝で見ました。

これは、霊的な現実であります。モーセの時にも起こりました。彼が四十日、シナイ山の上にいる間にイスラエルの民は金の子牛を拝みました。使徒の働きでは、パウロがエペソの長老たちを集め、自分がいなくなった後に狼が入ってくる、しかもあなたがたの間に狼が出てくることを話しました。「私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中にはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。(使徒 20:29-30)」

神に立てられた指導者が不在の時に起こる、霊的混乱という現実を 13 章で見ることができます。さらに、モーセもそうでしたが、それらの問題に対して速やかに断固たる対処を取っていったネヘミヤの姿も読むことができます。

#### **1B 混血の者 1-3**

13:1 その日、民に聞こえるように、モーセの書が朗読されたが、その中に、アモン人とモアブ人は決して神の集会に加わってはならない、と書かれているのが見つかった。13:2 それは、彼らがパンと水をもってイスラエル人を迎えず、かえって彼らをのろうためにバラムを雇ったからである。しかし、私たちの神はそののろいを祝福に変えられた。13:3 彼らはこの律法を聞くと、混血の者をみな、イスラエルから取り分けた。

申命記 23 章に書かれてあることですが、それに基づいて混血の者たちを取り分けました。これは人種主義という問題ではありません。そうではなく、ここにもあるように混じり合うことによって、モアブ人あるいはアモン人が持っているイスラエルへの呪いが入ってくることを防ぐためでした。バラムの助言によって、イスラエル人が神罰を受けたという悲惨な出来事が歴史としてイスラエルには残っています。

## 2B 神の宮への侵入 4-9

13:4 これより以前、私たちの神の宮の部屋を任されていた祭司エルヤシブは、トビヤと親しい関係にあったので、13:5 トビヤのために大きな部屋を一つあてがった。その部屋にはかつて、穀物のささげ物、乳香、器物、および、レビ人や歌うたいや門衛たちのために定められていた穀物と新しいぶどう酒と油の十分の一、および祭司のための奉納物が保管されていた。13:6 その間、私はエルサレムにいなかった。私は、バビロンの王アルタシャスタの三十二年に、王のところに行き、その後しばらくたって、王にいとまを請い、13:7 エルサレムに帰って来たからである。そのとき、エルヤシブがトビヤのために行なった悪、すなわち、神の宮の庭にある一つの部屋を彼にあてがったことに気づいた。13:8 私は大いにきげんを悪くし、トビヤ家の器具類を全部、その部屋から外へ投げ出し、13:9 命じて、その部屋をきよめさせた。そして、私は、神の宮の器物を、穀物のささげ物や乳香といっしょに、再びそこに納めた。

恐ろしいことが起こりました。律法の中に書いてあるように、トビヤはアモン人であり、まさに追い出されなければいけない人です。そして、ネヘミヤが盟約として誓わせた、祭司やレビ人が奉納物を受けて保管するところに、トビヤが大きな部屋を持っていたのです。そして、それを大祭司エルヤシブが提供したというのですから、考えられません。ネヘミヤがペルシヤから再びエルサレムに戻ってきたのは、紀元前 430 年頃のことであろうとされています。アルタシャスタの第二十年にエルサレムに帰還して、第三十二年、すなわち紀元前 432 年に戻ったので十二年間、ユダの総督になっていました。そして、二年ぐらい経って戻ってきていますが、この有様です。

しかし、これが神の民の間で起こる現実であり、キリスト教会の中でも起こる現実であります。入ってきては決していけない教え、入ってきてはいけない人がなぜか、中心的人物が招き入れてしまいます。けれども大事なのはネヘミヤの対処です。速やかに、断固として対処しました。

## 3B レビ人の欠乏 10-14

13:10 私は、レビ人の分が支給されないので、仕事をするレビ人と歌うたいたちが、それぞれ自分の農地に逃げ去ったことを知った。13:11 私は代表者たちを詰問し、「どうして神の宮が見捨てられているのか。」と言った。そして私はレビ人たちを集め、もとの持ち場に戻らせた。13:12 ユダの人々はみな、穀物と新しいぶどう酒と油の十分の一を宝物倉に持って来た。13:13 そこで私は、祭司シェレムヤと、学者ツアドクと、レビ人のひとりペダヤに宝物倉を管理させ、マタヌヤの子ザクルの子ハナンを彼らの助手とした。彼らは忠実な者と認められていたからであった。彼らの任務は、兄弟たちに分け前を分配することであった。13:14 私の神。どうか、このことのために私を覚えていてください。私の神の宮と、その務めのためにしたいろいろな私の愛のわざを、ぬぐい去らないでください。

午前には話しましたように、エルヤシブが奉納物の保管庫をトビヤに与えることができたのは、それだけの空間ができていたからです。つまり、人々が神殿にシェケルを支払わなかった、また奉納

物や十分の一、その他の捧げ物を持ってきていなかったからに他なりません。それでレビ人たちも支給されていないので、神の宮での奉仕が見捨てられていたのです。先ほどの話ですね、主のお仕事に携わることを支えることは、そのまま神を礼拝することを疎かにしないことにつながります。

そしてネヘミヤはここでも速やかに対処しました。彼はまず、代表者たちを詰問しています。それから、レビ人を元のところに集めました。それで、ユダの人々は捧げ物を持ってきました。さらに、祭司と学者、レビ人に宝物倉を管理させました。大事なのは彼らが、「忠実な者と認められた」からであります。多くの人々が能力を見ます。この人はできるのに、なんで奉仕をさせないの？という質問をこれまでも受けてきました。私は忠実さを見ています。奉仕に立つということは、忠実かどうかによって量られるからです。

そしてネヘミヤは祈りました。彼が祈りの人であったことを思い出してください。この辛い働きを、彼は独りでしななければならなかったでしょう。けれども主は宮を愛するネヘミヤの業を覚えていてくださいます。それで主に祈りを捧げたのです。

#### 4B 安息日の商売 15-22

13:15 そのころ私は、ユダのうちで安息日に酒ぶねを踏んでいる者や、麦束を運んでいる者、また、ろばに荷物を負わせている者、さらに、ぶどう酒、ぶどうの実、いちじくなど、あらゆる品物を積んで、安息日にエルサレムに運び込んでいる者を見つけた。それで私は、彼らが食物を売ったその日、彼らをとがめた。13:16 また、そこに住んでいたツロの人々も、魚や、いろいろな商品を運んで来て、安息日に、しかもエルサレムで、ユダの人々に売っていた。13:17 そこで私は、ユダのおもだった人たちを詰問して言った。「あなたがたはなぜ、このような悪事を働いて安息日を汚しているのか。13:18 あなたがたの先祖も、このようなことをしたので、私たちの神はこのすべてのわざわいを、私たちとこの町の上に送られたではないか。それなのに、あなたがたは安息日を汚して、イスラエルに下る怒りを加えている。」

まずユダヤ人の中で商売をしている人々が、安息日にいました。ネヘミヤは彼らを咎めています。それだけでなく、ツロからやって来て安息日に、エルサレムの中で商売をしている人々がいました。ネヘミヤは、代表者たちを詰問して咎めています。そして大事なのは、彼がここまで激しく、強く迫っているその根拠が、過去の預言者の言葉だったのです。エレミヤ書 17 章 20-27 節に、まさにこのことをすればエルサレムに火がつけられる、つまり滅びるということをエレミヤは語っていました。ですからネヘミヤは、今、激しくなっているけれどもそれはもっとも恐ろしいことが、これを続けていたらエルサレムに下るという恐れがあったので、妥協なく、強く対処しました。

13:19 安息日の前、エルサレムの門に夕やみが迫ると、私は命じて、とびらをしめさせ、安息日が済むまでは開いてはならないと命じた。そして、私の若い者の幾人かを門の見張りに立て、安息日に荷物が持ち込まれないようにした。13:20 それで、商人や、あらゆる品物を売る者たちは、

一度か二度エルサレムの外で夜を過ごした。13:21 そこで、私は彼らをとがめて言った。「なぜあなたがたは、城壁の前で夜を過ごすのか。再びそうするなら、私はあなたがたに手を下す。」その時から、彼らはもう、安息日には来なくなった。13:22 私はレビ人に命じて、身をきよめさせ、安息日をきよく保つために、門の守りにつかせた。私の神。どうか、このことにおいてもまた、私を覚えていてください。そして、あなたの大きいないつくしみによって私をあわれんでください。

ネヘミヤは対処として、安息日に入る夕方になる前に門を閉じさせました。そして見張りを立てています。それでも荷物を持って来る輩がいます。ネヘミヤは詰問し、物理的に打ち叩くという脅迫も行っています。彼は真剣なのです。そして以前、そうしたように、レビ人に城壁の門の守りをさせました。それはエルサレムの門が普通の門ではなく、安息日に商売をさせないという霊的な意味があったからです。そしてネヘミヤは再び、このこともどうか憐れんでくださいと祈っています。

#### 5B 異邦人との婚姻 23-27

13:23 そのころまた、私はアシュドデ人、アモン人、モアブ人の女をめとっているユダヤ人たちのいるのに気がついた。13:24 彼らの子どもの半分はアシュドデのことばを話し、あるいは、それぞれ他の国語を話して、ユダヤのことばがわからなかった。13:25 そこで、私は彼らを詰問してのろい、そのうちの数人を打ち、その毛を引き抜き、彼らを神にかけて誓わせて言った。「あなたがたの娘を彼らの息子にとつがせてはならない。また、あなたがたの息子、あるいは、あなたがた自身が、彼らの娘をめとってはならない。13:26 イスラエルの王ソロモンは、このことによって罪を犯したではないか。多くの国々のうちで彼のような王はいなかった。彼は神に愛され、神は彼をイスラエル全土を治める王としたのに、外国の女たちが彼に罪を犯させてしまった。13:27 だから、あなたがたが外国の女をめとって、私たちの神に対して不信の罪を犯し、このような大きな悪を行なっていることを聞き流しにできようか。」

混血はいけないという強い悔い改めである盟約は始まったのに、ついにヘブル語が離せない子が出てくるまでの混血が進んでいました。ネヘミヤは、これまでの中で最も厳しい対処をしています。実際に数人を打ち、毛まで引き抜いています。以前、祭司たちの中にまで異邦人と結婚した者がいるという話を聞いたエズラは、自分の髭を抜いて呆然としていました。彼は自分を打ち叩き、痛めつけて罪を犯したことの嘆きを言い表していましたが、ネヘミヤはそれを彼ら自身にさせているのです。「お前たち自分の罪を悔いて、悲しみなさい！」ということをさせています。そして、ネヘミヤはこんなに厳しい対処をしている根拠を挙げています。まさに、エルサレムの王ソロモンがこの間違いを犯したから、罪を犯していきました。

#### 6B 宮の汚れ 28-31

そして、なんでこんなに墮落が急に起こったのか、その根本の問題をネヘミヤは明かします。

13:28 大祭司エルヤシブの子エホヤダの子のひとり、ホロン人サヌバラテの婿であった。それ

で、私は彼を私のところから追い出した。13:29 私の神。どうか彼らのことを思い出してください。彼らは祭司職を汚し、祭司やレビ人たちの契約を汚したからです。

大祭司エルヤシブが、アモン人トビヤに奉納物の保管庫を使わせたのか、と言いますと、彼の孫が、もう一人の敵サヌバラテの婿だったのです。サヌバラテの孫娘とエルヤシブの孫が結婚していました。トビヤとサヌバラテは結託していますから、それでトビヤに見返りとしてその部屋をあてがっていた、ということになります。この二人は政略結婚だったということです。

彼らがそのような世との妥協をしているのですから、当然ながら民は聖さを失います。奉納物も捧げるのはやめましょう。奉納物がないから、レビ人も生活が逼迫して家に帰ります。主への礼拝に妥協があるのですから、当然、安息日を守る情熱も失せてきます。そして、霊的指導者の張本人の家族が異邦人との結婚をしているのですから、他の民族と結婚する人々も出てくるわけです。すべては、主との愛の関係の中に、他の要素を取り入れたせいでもあります。

ですから私たちは、主のみを愛していくことの必要性が、痛いほど分かるのではないのでしょうか？主のみを愛することは偏狭である。私たちは、他のことも大切にしていかなければならない、と言います。そうでしょうか？主を愛することを知らずして、他のものを大切にできるのでしょうか？いいえ、主のみを愛するからこそ、そして主を愛する兄弟を愛するからこそ、他のものも大切にできるのです。そして、その愛は、神の宮を愛したネヘミヤと同じように、主への礼拝への情熱の中に表れるのです。

13:30 私はすべての異教的なものから彼らをきよめ、祭司とレビ人のそれぞれの務めの規程を定め、13:31 定まった時に行なうたきぎのささげ物と、初物についての規程も定めた。私の神。どうか私を覚えて、いつくしんでください。

他にも、モーセの律法にしたがって、あの時に盟約として定めたことをネヘミヤは断行しました。彼は署名しましたが、彼だけは最後までその責任を負いました。本当に彼は真実なリーダーです。初めに神の御言葉によって定めたことを、最後までやり通す人です。そして孤独であっても、主が憐れんでくださる、報いてくださるのです。

これでネヘミヤ記は終わりますが、変な終わり方をしていますね。ハッピーエンドではありません。しかし、ここで主が伝えたいことは、霊的改革に終わりはないのだよ、ということでありましょう。不断の努力によって、いつまでも続けなければいけないものであります。